

生活科 1年A組	だ い す き だ よ	辻本 郁夫
-------------	-------------	-------

1 単元について

(1) 単元設定の理由

①教科提案とかがわって

本年度生活科では「自分らしさを発揮し主体的にかかわる子どもを育てる生活科の学習」とテーマを設定し「かかわる」をキーワードとして実践を行った。子どもたちはいわゆる「もの・こと・ひと」など身近な対象とかがわる中で学習に主体的に取り組むことができる。つまり子どもたちは具体的に見たり、聞いたり、実際にやってみる活動の中で、子ども本来の持っている素晴らしい姿を見せてくれる。また、教室に持ち込まれた身近な所にある自然や社会の具体的な「もの」や「こと」が子どもの学習意欲を沸き立たせてくれることもある。子どもたちはこれらの対象と出会うことによって目や耳や手など五感を十分に働かせ、周りの環境に働きかける。情報化社会の中で一見何でも知っているつもりになってはいるが、実際にやってみることを通して得た新しい知の世界は、子どもたちにとって驚きであり発見であり生きて働く力である。この驚きや発見が意欲的・主体的な活動を生み出すエネルギーになっていくものと考えた。

さらに少子高齢化の社会にあって子どもはとても大切にされてはいるものの、過保護・過度な受験戦争の中、心の中に隙間がぽっかり空いている子も感じられる。どの子どもにとっても、自分らしさが発揮でき、その子のよさがかけがえのないものとして大切にされ認められ、自分の居場所の保障される楽しい所があることで心が満たされる場合もある。翻って考えてみると、子どもの良さを発揮できるような場所や機会を学習活動の中に設ける必要もある。と同時に学級風土を教師サイドから作るように心がけて行くことも大切である。

これらのことを鑑み、本単元ではどの子どもにとっても大切でかけがえのない「家族」を題材として取り上げ、自分らしさを発揮しながら対象に主体的にかかわっていける子どもを育てるとい研究テーマに迫っていきたいと考えた。

②本単元の主張点

本単元の学習は、小学校学習指導要領解説生活科の内容(2)すなわち

家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする。

にあたる。ここでは子どもたちが家族とともにしていることや家族にしてもらっていることを振り返り、家族のことや自分でできることなどについて考え、自分の役割を進んで行うようになることを意図している。また、家庭における自分の生活を見直し、規則正しく健康に気を付けて生活しようとする、積極的な生活態度を育てることをも意図している。

さてクラスの子どもたちに「おうちの人と家にいるときはどんなことをしたの」と聞くと一緒に遊んだことや、夕食をいっしょに食べたことなど家族団欒のことのほかに、「食器運びをしたよ」「今日の朝、新聞とりをしたよ」などの話をしてくれる。このように、子どもたちは家庭において、正しい生活を送ることや家庭の中で仕事を行うことをある程度は実践してきている。ただ、この時期の子どもたちの行動やつぶやきに注意深く耳を傾けてみると、家庭に全面的に依存して、家庭や家族の役割や価値について見直す機会が少なく、無意識・無自覚のうちに生活をしていることが多いようであった。また、家族全員から大切にされていることや自分の家庭のよさなどをあまりにも当たり前で身近なため、家庭に対する感謝の気持ちを実感し

ていない子どもも少なからずいた。

そこで、この学習材を取り上げ、家族で過ごす楽しみや家族の温かさ、家族の大切さ・よさに気づき、家族のために役立つ喜びと自信を体感させることを意図した。目的を持って調べたり、調べたことを紹介することにより、自分も家族の一員であることを意識付けることができると仮定した。この意識をもとに、家族が楽しく家庭生活を送れるように自分の役割を進んで果たすとともに、自分のことは自分で行い、規則正しく健康に気をつけて生活できるようになることが期待できるものと考えた。そしてこのような活動の中から、より家族を身近に感じ自己の中に家族の存在を今以上に構築させていくことを願った。

ところで、今までの学習の大部分は活動の場は学校であり、教師が絶えず目を行き渡らせて活動の状況を把握できた。しかし、この単元においては今までの学習とは異なり、主たる学習の場が家庭になってくる。家庭で行うとなると教師が目を行き渡らせることが不可能になってくる。ここで登場してくれるのがおうちの人である。おうちの人に協力を求め、子どもの活動意欲を喚起させることに留意することでこの学習のねらいとする価値にさらに一歩近付けることもでき、効果が上がるものと考えた。

次に生活科は各教科等と横のつながりも重視する教科である。その点から考えると、ある時は図工科とまたある時は国語科とそれぞれつ関連付けて学習を行うことでより一層の成果が期待できるものと鑑みた。

(2) 単元目標

- ・自分の家族一人ひとりに目を向け、いっしょに過ごすよさや楽しさに気付く。
- ・家族のそれぞれが果たしている役割に気づき、自分も家族の一員としての役割を果たそうとする。
- ・家族の一員として、自分でできることは自分自身で行い、家族がお互いに気持ちよく過ごせるように努める。

(3) 単元計画

第1次	家の人を紹介しよう (3時間)	・自分の家族について調べたことを発表し紹介する。
第2次	家族と触れ合おう (4時間)	・家の人と交流する。 ・家族との楽しかった出来事を紹介する。 ・家の人に世話になったことを思い出す。
第3次	何名人になれるかな (7時間) + 課外	・家の仕事を調べる。 ・家庭において自分の決めた仕事を実践する。 ・自分の行った仕事を報告する。 ・新しい仕事にも挑戦して続けて行う。
第4次	家の人に手紙を書こう (3時間)	・家の人に心を込めた手紙を書く。

2 単元の考察

(1) 子どもが「意味と内容」をひろげた場面

①家族との触れ合いからのひろがり

家族との触れ合いということで本単元では家族を紹介すること、家族との交流の場を考えた。第1次では自分の一番紹介したいお家の人を決め、インタビューを行い、ペープサートにして紹介した。着目児◆夫はお父さんを、着目児♣男もお父さんを、着目児♠子は妹を、着目児♥子はお母さんをそれぞれ紹介した。この4人を含めどの子も自分の大好きな家族を紹介できるという喜びのもと活動にのめり込んでいった。

着目児◆夫の活動から考察してみると

ぼくのおとうさんの なまえは ともおです。とくいなりようりは たまにつくる ぎょうざとさんどいっちとほっとけ一きです。ほっぺたが おちるくらいおいしいです。すきなあそびはすいえいです。それとすきな どうぶつは いぬと いました。なぜかという と むかし かっていたからだそうです。しごともしています。やさしいおとうさんだなと おもいました。

普段事実として見ていることについては認識しているが、父親の内面にあることについては聞き取ることで知ることができた。この活動を通して改めて父親を「僕の自慢できるお父さん」として見直すことができた。

また、第4次では単元の締めくくりとして家族に手紙を書くことにした。家族の子どもへの思いを元にお世話になっている家族に手紙を書いた。

着目児♣男は おかあさんへ

これからまいにち おふろそうじを がんばります。ぼくはこれから おもいやりがあってやさしい子になります。いつもせわや ごはんをつくってくれて ありがとう。これからも つくってください。

と、書き記した。

また、ある女兒は おにいさんへ

いつも やさしくしてくれて ありがとう。わたしも やさしい人になって なにかを してあげたいです。これからも やさしい おにいさんで いてね。

と、この子のお兄さんに対する感謝の気持ちを素直な言葉で書き綴った。家族にあてた手紙を見るなかで子どもなりに家族に対する感謝の気持ちや自分の思いをうかがい知ることができる。今回は家族を見つめる機会を意図的に設けたこと、また道徳の「心のノート」を併用して家族の思いを考える授業を行ったことがよい方向へと子どもたちを誘うことができた。普段、見過ごしがちな家族に対する思いがこの学習をきっかけにしてひろがっていたようである。

②仕事にかかわることからのひろがり

家庭はあまりにも子どもたちにとって身近であるために、家庭生活における家族の役割や自分の果たすべき役割に気付かずに生活していることが多い。そこで、家庭にはどのような仕事があるのか、それらの仕事は誰がどのように行っているのかを調査することを切り口として第3次の学習をスタートした。

クラスの子どもたちは「誰がどんな仕事」を家庭で行っているのか調査してきた。

着目児◆夫は 料理、洗濯、掃除、トイレ掃除、布団たたみ、風呂掃除など

着目児♥子は 洗濯、料理、花の水やり、風呂掃除、車洗い、洗い物など

を聞き取り調査をしてきた。

この聞き取りを元に、自分で実践できるお手伝いを決め活動にうつした。ただ活動の場が学校から家庭になるので、学級だよりも活用して協力を依頼した。

着目児◆夫は洗濯物たたみ、着目児♣男は風呂洗い、着目児♠子は料理、着目児♥子は花の水やりをそれぞれ自分のする仕事に決め、挑戦することにした。

ある一定の期間経過後、自分の活動を振り返ることにした。

- ◆・たくさんの洗濯物があるので大変でした。いつもお母さんがやってくれているのだな。
- ♣・お風呂がきれいになってうれしかったです。また、きれいにやってあげたいです。
- ♠・ママにいろいろおしえてもらって うれしかったです。おかあさんといっしょで楽しかったです。

今までは外側から見ていたものを内側から考えることで、家族が協力し合って家庭生活を支えていることを知り、また自分も家族の中の大切な一員であることに気付くことができた。これらの諸活動を取り上げることによって1年生なりに家族という社会の一員として、意味をひろげていけたものと考察する。

(2) 互いのまなざしが共鳴する実際の姿

子どもたちのまなざしの共鳴する場面として第3次の「何名人になれるかな」で振り返ってみる。子どもたちが自分のできるお手伝いを決め実践した結果を報告することにした。

「洗い物をした子」とその他の子どもの交流の一場面である

- ◎わたしはお母さんの洗った食器をきれいなタオルでふくお手伝いをしました。
- 僕も後片づけのお手伝いをしました。どんなところが難しかったですか。
- ◎お茶碗を割らないようにすることです。
- 上手にできましたか。
- ◎細かい所は人差し指にタオルをかけて、ふきます。コップなどは中にタオルを押し込んでくるくる回してふきます。
-

友達と実践を交流する中で意欲に結びつくと同時に、お手伝いという仕事を通して働くことの苦勞に気づくことができた。また、自分の行ったお手伝いを”名人役”になって教える場面を設けることで、初めて体験する仕事に興味を示す子や意欲を持つ子も出てきた。

さらに友達と自分の行ったお手伝いを交流することにより家庭での仕事に対する見方に変化が表れた。

3 成果と課題

家族に視点をあて単元を構成して、「家族、だいすき!」「おうちの人、だいすき!」と胸をはって言える子どもを目指して取り組んできた。活動や体験を軸とする展開活動を重ねることにより今まで以上に家族を見る目が育ったようである。

本校生活科の「自分らしさを発揮し主体的にかかわる子どもを育てる生活科の学習」という研究テーマに照らし合わせてみると、子どもたちの一番身近な家庭を活動の場に設定することで子どもたちの活動の意欲を刺激することができた。自分から進んでまた、友達のまなざしに影響を受け、家の人・お手伝いなどの対象に積極的にかかわることもできたと思う。さらに、子ども一人一人の持ち味を色々な活動の場で生かすことができたのではないだろうか。

ただ、生活科の重要な位置を占める知的な気付きを促す側面から考えてみると、教師の発問や支援が効果的でなく、十分な成果が得られなかった。的確な支援や発問のあり方を検討していかなければならない。さらに「大胆な活動と緻密な計画」に裏付けされる生活科学習を考えるなら、今回のようなお手伝いを取り上げた場合の大胆な活動とはどのようなものであるか、今後実践を重ね探っていききたい。